

コペルニクスのがん治療法の出版を祝う

小林先生は医学部卒業後、京都大学大学院にてがんの基礎研究を行い、更に東京大学大学院にて極められ博士号を取得され、長年のがん患者のために尽力なされました。そして、その集大成として当本を著わされました。独自のがん理論と自然医学的治療法が一貫して流れ、現代腫瘍学（オンコロジー）への痛烈な批判と、あるべき姿を示された啓蒙本といえます。

本書の第一章が三分の二ページほど紙面を割いてありますが、発想の転換が必要との要旨です。現代がん理論は、がんは遺伝子の反乱で生じた細胞塊であるとするものだが、それはもはや天動説であると喝破しています。繰り返すレントゲン照射による診断、治療は毒ガスの延長である抗がん剤、臓器ごと切り除く手術、放射線によるがん焦土作戦は元気をくじくことはいわずもがなである、としています。

がん遺伝子突然変異説とがん組織は生体反乱軍の塊であると信じてきた私は「ム！」と一ページ目からガーンとショックが襲いました。小林先生曰く、がんは細胞内のミトコンドリアの「呼吸代謝異常」であると説き、この理論は昔から知る人ぞ知る理論で、その道の人々には常識的なことであるとし、二発目のガーンで、私もコペルニクスの転回をさせられ地動説に乗り換えた次第です。天動説から地動説へは、物質的病理から機能的病理への転換です。遺伝子異常説では物理的に生じたがんを、大型検査機器のCR、CT、MRI、PETなどで映し出してがん診察し絶滅を図るが、先生によれば映像に映し出されるほど進行したがんに大なたを振るうのはいかなものかと警告されています。

うつ病のように脳の配線異常の機能性疾患は画像検査には現れません。がんをミトコンドリアの機能異常疾患とすれば、がんの塊が出現する前段階で診断できるはずであると説いています。第二章は、小林先生はがんの検出は血液検査の腫瘍マーカーを組合せて診断できることを述べられ、先生の全身のがんを網羅す

る腫瘍マーカーを組み合わせ方式で、がんの存在を発見する「TMCA検査（腫瘍マーカー総合診断法）」という武器の説明です。当検査法での腫瘍マーカーの個々の名前は企業秘密で表わされていませんが、「がん細胞から出る特異マーカー」、「がん間質から出る関連マーカー」、「がん血管から出る増殖マーカー」の三つのリスク因子の組み合わせ検査法であると理論化され、なるほどと納得いたしました。第三章ではこの検査から得られた結果を、手術や抗がん剤ではなく、統合療法医師でもある先生は、がんは機能性疾患であるが、その根悪は食生活の大きな洋風化がもたらしたと論じています。端的に言えば動物性蛋白質の過剰摂取であって、自然食を根本としてきた日本の食事を軽んじ、

電子レンジなど手抜きの新料理法などが加わり、ミトコンドリアの機能不全を招いた、日本食本来の姿に戻すべきとしています。このことは私も全く同感で、まほろばクリニックでまほろば式医療を展開しています。先生とは相通ずるところが多く、今後の医療を共に進めてゆこうということで書の推薦を行った次第です。

中村信哉 まほろば東京クリニック院長・東京家政大学名誉教授・栄養学